けんぽく

ふくしまから はじめよう。
Future From Fukushima.

平成26年12月25日発行

「食」と「ふるさと」新生運動ニュース

第13号［平成26年12月号］

編集・発行　福島県県北農林事務所

県北地方の「食」と「ふるさと」新生運動に関する情報をお知らせします。

◆伊達の「あんぽ柿」、全国へ向けて出荷開始！

平成 26 年 12 月５日（金）、ＪＡ伊達みらい梁川共選場で、福島県あんぽ柿産地振興協会の主催による、「平成 26 年産伊達地方特産あんぽ柿出発式」が開催されました。

伊達地方のあんぽ柿は、平成 25 年に、伊達市、桑折町、国見町の一部地域が加工再開モデル地区に指定され、３年ぶりに加工が再開されました。加工再開２年目である今年は、さらにモデル地区が拡大され、震災前の出荷量の約半分となる 700 トンの出荷を目指しています。

あんぽ柿は、出荷前に非破壊検査機器で全量分析し、放射性物質が基準値以下であることを確認します。今年は、出荷量の増加に合わせて、検査機器の数を昨年の 12 台から 26 台に増設し、検査体制を強化しています。

出発式には、伊達管内のあんぽ柿生産者や市場関係者、関係機関など約 200 人が出席し、あんぽ柿を載せたトラックの前でテープカットが行われました。また、非破壊検査機器の説明が行われ、あんぽ柿を詰めた箱が検査機器に入り、放射性物質の測定、検査済のシールが貼付されるという一連の作業が実演されました。

出発式の様子

会場内のテーブルには、「蜂屋（はちや）」と「平核無（ひらたねなし）」の２種類のあんぽ柿の試食も用意されました。

試食の様子　甘くて、おいしい！

今年は原料柿の着色が優れ、製品の品質も高いことから、食べた人からは「甘みが強くておいしい。」との感想が数多く聞かれました。

今年のあんぽ柿の加工は、晩秋の天候にも恵まれて順調に進んでいます。現在は「平核無」の出荷がピークを迎えており、今後、年末年始にかけては「蜂屋」の出荷が主流となります。

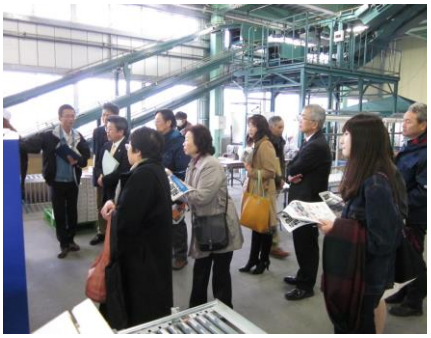
産地では、今後も消費者の皆様においしいあんぽ柿を届ける取組を継続してまいります。伊達地方のおいしいあんぽ柿を、ぜひ御賞味ください。

（伊達農業普及所）

◆「ふくしまから　はじめよう。『食』と『ふるさと』新生運動」推進のための意見交換会（あんぽ柿）！

平成 26 年 12 月 11 日（木）、伊達市梁川のＪＡ伊達みらい梁川共選場で、県北管内の生産者、消費者、各関係機関の代表となる方を参集し、「ふくしまから　はじめよう。『食』と『ふるさと』新生運動推進のための意見交換会」を開催しました。

今回は、県北地方の特産品であるあんぽ柿のブランド回復・強化をテーマに開催しました。意見交換者としてお集まりいただいたのは、ＪＡ伊達みらいあんぽ柿生産部会　部会長　宍戸里司氏（生産者）、福島県消費者団体連絡協議会　事務局長　田崎由子氏（消費者）、飯坂温泉観光協会　事務局主任　畑中靖氏（観光関係者）、有限会社　松月堂ベーカリー　マザーヤマキ　代表取締役社長　八巻隆雄氏（ふくしま応援シェフ、地元菓子店）、福島学院大学短期大学部　食物栄養科　講師　中村啓子氏（公益社団法人福島県栄養士会県北支部長兼務）の５名です。



放射性物質非破壊検査機器を視察

まず最初に、共選場で、あんぽ柿の放射性物質の非破壊検査機器について視察し、その後、会議室で、あんぽ柿の試食を行いながら、消費者への有効な販売ＰＲ方法や、あんぽ柿のブランド回復のため産地に望む取組などについて意見交換を行いました。

意見交換者からは、「放射性物資の検査済みシールの意味を、もっと消費者に伝えていく必要がある。」、「生産者のがんばっている姿、産地の状況を消費者に広く知ってもらうことが必要。」といった意見が寄せられました。また、ＰＲ方法に関しても「子供が好きなアイスクリーム、クッキーやドレッシングなどの身近な加工品にしたり、高齢者向けのお弁当に使用してはどうか。」、「冷凍して、ドライフルーツとして夏場に販売してはどうか。」、「あんぽ柿を使った料理コンテストで、新たな食べ方を提案してはどうか。」などの様々なアイデアが出されました。

参加した大学生や、新生運動の構成員メンバーも含め、活発な議論が交わされ、実りある意見交換会となりました。

あんぽ柿について、活発に意見交換

（企画部）

◆あんぽ柿の作成体験 親子ツアーを開催！

平成 26 年 11 月 30 日（日）、伊達市において「県産農林水産物の安全・安心実感ツアー　～作ってみよう！トローリとろける『あんぽ柿』～」が開催されました。

これは、小学生等の子供とその親を対象に、農林水産業者等の安全確保に向けた取組や、放射性物質検査の手順等について見学・体験する日帰りツアーです。

今回は、特産品「あんぽ柿」の発祥の地である伊達地方を親子で巡り、あんぽ柿の作成体験や、非破壊検査機器による放射性物質の検査状況、直売所での販売状況等を視察していただく内容です。

生産者の説明
「こうやって皮をむくんだよ」

ツアーは、大変な人気で応募多数となり、当日は、予定していた人数を上回る 18 組 36 名の親子が参加しました。

参加者は、まず、５件の生産農家に分かれて、あんぽ柿の皮むきや吊し体験を行いました。小学生は、生産農家の説明を聞いた後、親と一緒に真剣に作業に取り組んでいました。

やながわ希望の森公園　伝承館で、郷土料理の昼食を食べた後、ＪＡ伊達みらい梁川共選場で、非破壊検査機器を視察しました。特に、男の子は、初めて見る機械に興味津々で、中には機械と記念撮影をする親子も見られました。

最後に、ＪＡ伊達みらいの直売所　みらい百彩館「んめ～べ」であんぽ柿の試食や直売所での買い物を楽しみ、ツアーは終了となりました。

お母さんと一緒に皮むき体験

参加者した親子は、実際に体験や視察を行ったことで、産地での取組への理解が深まった様子で、産地にとっても、良いＰＲとなりました。

真剣に作業に取り組んでいます

直売所の前でみんなで記念撮影

（企画部）

◆「五十沢あんぽ柿五十周年記念」の碑にて！

国道 349 号線沿い、ＪＡ伊達みらい五十沢支所前の倉庫の横に「五十沢あんぽ柿五十周年記念」の碑があります。ここ伊達市梁川町五十沢（いさざわ）は、日本で初めてあんぽ柿が開発された発祥の地です。

ＪＡ伊達みらいあんぽ柿生産部会　部会長宍戸里司氏にあんぽ柿の歴史の一部を紹介していただきました。

あんぽ柿は、大正の中頃米国カルフォルニア州の干しぶどうを乾燥する硫黄燻蒸技術を、柿に応用したのが始まりと聞いています。大正 12 年、東京神田市場に「あんぽ柿」として出荷され、それまで黒い色の干し柿と異なり飴色の見事なあんぽ柿は数倍の値段がついたと記録されています。

あんぽ柿の硫黄燻蒸技術が確立するのは昭和になってからですが、年末年始の贈答品として、東京・京阪神・中京・北海道地方の市場で好評を博し、日本一の「あんぽ柿」と呼ばれるようになっていきました（「五十沢は冬期間の余剰労力をこれに当て、出稼ぎする人も少なく県北のユートピアとうたわれる郷土となった。」（五十沢村誌より））。

「伊達のあんぽ柿は、表面が飴色で肉質がゼラチン状、自然のやさしい甘さはどんなスイーツにも負けない。是非、若い人にもたくさん食べていただきたいと思っています。また、全国各地で、伊達のあんぽ柿を待っているお客さんが大勢おられるので、90 年以上の歴史のあるあんぽ柿の産地を早く完全復活させて、先人の皆様にも安心していただけるようにがんばりたい。」と、五十沢あんぽ柿五十周年記念の碑にて力強く語られました。

宍戸部会長

碑文であんぽ柿の歴史を紹介

（企画部）

◆「けんぽく６次化ミーティング」交流会を開催！

平成 26 年 12 月９日（火）に、「けんぽく６次化ミーティング第１回交流会」が、福島市鎌田のウィル福島（福島卸商団地協同組合）コンベンションホールＡにおいて開催され、果樹農家や農産品加工グループなどから 85 名の参加がありました。

運営協議会の座長である福島県県北農林事務所の川島企画部長から挨拶があった後、ホシザキ東北株式会社コンサル室の佐瀬正晃室長から「農産加工の流れと留意点～新しい商品開発の提案～」と題して、基調講演をいただきました。小規模加工所の開設に伴う事業展開の事例や、新たな商品開発のアイディアについて、豊富なコンサル事例に基づいた分かりやすい解説がありました。

参加者交流会では、農産品の加工に用いる調理器具や充填機などが会場に展示され、東京から来ていただいたパティシエによるデモンストレーション実演もあり、参加者の皆さんは興味深く見入っていました。

また、展示機器を使った加工品の試食や、６次化会員の皆さんの展示コーナーもあり、会場に甘い香りが漂う中、新しい事業展開に関する積極的な情報交換などが行われ、有意義な交流会となりました。

ホシザキ東北(株)の佐瀬室長による基調講演

デモンストレーション実演と参加者交流会

6次化会員による情報交換

（企画部）

◆原木しいたけのPRが行われました！

平成 26 年 12 月９日(火)に、県のアンテナショップ日本橋ふくしま館 MIDETTE（ミデッテ）において、「福島県原木椎茸再生産をめざす会」による原木しいたけのＰＲが行われました。

原木しいたけとは、原木栽培（コナラやクヌギ等の原木に種菌を植えつける方法）により、生産したしいたけです。原木栽培のきのこは、一般的に本来のものに近い味と香りを楽しむことができます。

日本橋ふくしま館前での呼び込み

今回は、今年７月に、国の出荷制限が解除された伊達市霊山町の生産者を含む県北、相双、会津の各地域で、原木栽培に取り組む生産者が、しいたけの試食と販売を行いました。

原木しいたけとPRチラシ

試食では、生産者の秘伝のたれで味つけをした肉厚なしいたけが、道行く人にふるまわれ、好評を博していました。

館内での販売状況

１日限りの販売でしたが、原木しいたけのおいしさや安全性をＰＲし、販売用に持ち込んだ 120 パックを完売することができました。

秘伝のたれで蒸し焼きにした
試食用しいたけ

生産者の方々は、原発事故の影響により、地元の原木が使用できなくなる中、他県産の原木の使用を余儀なくされています。それでも、原木栽培にこだわりをもち、生産をつづけています。

皆さんも、ぜひ、おいしいしいたけを味わってみてください。

（森林林業部）

◆県内巡回「復興パネル展」を開催！

福島県では、全国の自治体より職員派遣等の支援を受けながら、農地、農業用施設や海岸堤防の復旧・復興を着実に進めていますが､震災からの時間の経過とともに、人々の関心が薄れてきているという側面があります

そこで、現在、福島県が取り組んでいる復旧・復興の取組とその進捗状況を、多くの県民の皆様に理解していただくことを目的に、農村整備事業で、県内巡回「復興パネル展」を開催しています。

県北農林事務所においては､平成 26 年 11 月 21 日(金)と 12 月１日（月）の午後の２回にわたり、二本松市米沢下川原田　道の駅安達（下り線）道路情報ターミナル内で、一般県民向けに、パネルの展示行いました。

パネルの内容は､東日本大震災により､福島県の農業・農村が受けた被害の状況や、その後の復旧への取組状況（復旧前後の比較写真)､福耕支援隊（農業土木技術者の県外派遣職員）の紹介などです。

パネルを御覧になった一般県民の方からは､「農地や農業用施設については、日々、着実に復旧・復興していますね｡」､「復旧・復興の状況は、写真を見ると実感が湧きます｡」などのコメントが寄せられました。

復興パネル展の様子

拡大！

展示されたパネル

（農村整備部）

◆「JA新ふくしま営農指導員養成教室」が開催！

平成 26 年 12 月９日(火)、福島市のＪＡ新ふくしま北信支店において、「ＪＡ新ふくしま営農指導員養成教室」（以下：養成教室)の開校式が行われました。

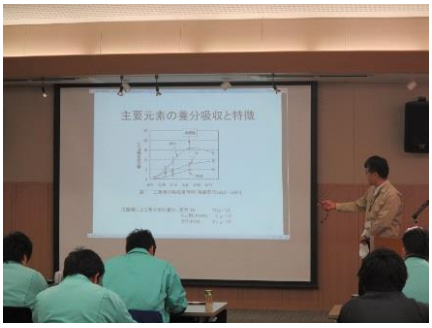
養成教室は、ＪＡの営農指導員が農産物の生産技術や農業施策等に関する知識を習得することを目的に、昨年度に引き続き開催されたもので､若手営農指導員 22 名が参加しました。

講義は来年の３月まで毎週１回、合計９回行われる予定です。内容は、土壌肥料、病害虫防除・農薬適正使用や現地実習など、技術的なものを中心に多岐にわたっています。また、一部の講義は農業振興普及部の職員が講師となり、昨年度からステップアップした内容で行う予定です。

開校式後の、第１回目の講義は、当部の職員が講師となり、作物別の施肥方法など土壌肥料について説明しました。

今後は、養成教室を通じて、営農指導員が病害虫防除対策や、放射性物質対策などを含めた幅広い知識の習得と技術力のアップを図り、担当する作物はもとより、生産者からの様々な問い合わせにも対応できるスキルを身につけていくことが期待されます。

今回の養成教室をきっかけに、営農指導員と農業振興普及部の職員の連携を、より一層強化し、様々な課題を解決することで、生産者が高品質な農産物を生産できるよう支援していきたいと思います。



土壌肥料の講義

真剣に聴講する営農指導員

（農業振興普及部）

◆「福島県と安達地方の観光物産展」を開催！

平成 26 年 12 月 6 日（土）～7 日（日)、東京都台東区にある浅草寺の境内において「福島県と安達地方の観光物産展」が行われました。

当日は、県北農林事務所のほか、県北地方振興局、県北建設事務所（パネル協力)、ふくしまＨＡＰＰＹ隊、国際交流協会の多文化共生サポーターが協力して福島県の復興状況の紹介に併せて観光や文化、特に県産農林水産物のおいしさと安全性をＰＲしました。

安達地方（二本松市、本宮市、大玉村）の出展ブースでは、地域の名店のほか、郷土料理や６次化商品などの店が建ち並び、来場者を飽きさせないバラエティに富んだイベントとなりました。

福島県と聞いて取り扱う商品の安全性を心配されるお客様もいらっしゃいましたが、県の取組などの説明を聞いて安心した様子で、多くのお客様が、楽しく買い物や食事をされていました。

また､会場の浅草寺は東京屈指の観光スポットのため、修学旅行等の国内旅行者のほか、海外、特にアジア圏の団体客が大変多く来場され、通訳に対応した多文化共生サポーターの皆さんは大忙しで、大盛況の二日間となりました。

出展ブースの様子

各市町村等の代表者とキャラクター

（企画部）

福島市消費者団体懇談会

私たちのくらしは、私たちが守ろう！

【組織紹介】

現在の組織の前身は、昭和 48 年の石油ショックで物不足と物価急騰した時に、くらしを守るために立ちあがった市の女性団体で結成した福島市消費者団体連絡協議会です。昭和 54 年に現在の福島市消費者団体懇談会となり、その意思を継承し、消費者問題に関する情報交換、調査、研究、学習会の開催などを事業の柱としています。

特筆すべき活動としては、発足当初からの「簡易包装の取組」と、平成 21 年の「レジ袋有料化」です。簡易包装は、過大過剰包装が問題として、昭和 58 年から店舗での実態調査と事業者との懇談会を平成 20 年まで実施しました。「レジ袋有料化」は、市、事業者とともに意見交換会、ＰＲ活動に参加し、その実施に大きく貢献しました。

また昭和 57 年から「くらし展」を継続しています。「くらし展」ではその時々のテーマを取り上げ、くらしを守るために消費者はどうあるべきかを提案し、消費者の啓発に努めています。

現在は８つの消費者団体で構成されています。各団体は、それぞれが問題意識を持ちおのおの活動しています。月 1 回の定例会では各団体の代表者が様々な問題について話し合っています。

今年の活動としては、総会時の食の安全に関するドキュメンタリー（遺伝子組み換え作物の安全性についてのドキュメンタリー「世界が食べられなくなる日」）の上映会、視察研修（トマトランドいわき）の実施、環境フェスタへの参加そして、次年度の「くらし展」に向けての勉強会を始めています。研修として、毎年「東北消費者フォーラム」、「全国消費者フォーラム」にも参加し、見識を深めています。

【特にＰＲしたいこと】

平成 27 年 7 月 11 日（土）、12 日（日）アオウゼで「くらし展」を開催します。

H26総会時の食の安全に関する
ドキュメンタリーの上映会

H26視察研修（「トマトランド
いわき」の水耕栽培トマト）

H26役員勉強会

H26くらし展（海外視察研修報告）

H25前回くらし展の様子

H25前回くらし展の様子（講演会）

皆様からの御意見・御要望など　様々な情報をお待ちしております。

福島県県北農林事務所　企画部　地域農林企画課
電話　024－535－0382
FAX　024－536－9590
電子メール　kikaku.af01@pref.fukushima.lg.jp

ふくしまから
はじめよう。